巻　頭　言

紀要発行にあたって

仙台青葉学院短期大学学長
鈴　木　一　樹

このたび本学研究紀要第10巻第２号を発行いたしましたので、皆様方のご高覧に処する次第です。

このところ「教養」が大きく注目されています。実際、いま世界で活躍している経営者の多くは哲学や文学を専攻していたといいます。確かに、グローバル社会においては他国の文化を理解することは必要不可欠ですし、経営上の重大な意思決定を行う際にも自身の哲学を拠り所とすることは非常に意義のあることです。ただその一方で、教養は専門分野と違い仕事に直結するものではなく、広範囲にわたることから何となく敬遠、軽視されがちです。

専門分野においては理論が非常に重要ですが、その前提として膨大な量の知識が必要とされます。そのためどうしても覚えるという作業が必要になります。特に学生にとってはこの作業が勉強の中で非常に大きな位置を占めます。資格試験を目指すような場合はなおのことです。一方、教養の分野においては理論ではなく、感性が重要になります。すなわち教養は覚えるものではなく、自ら感じ、思考し、探究しながら徐々に身につけていくものなのです。

近年、AI が急速に普及し、仕事の在り方が見直されてきています。記憶する能力はどう転んでも人間は AI に勝つことはできません。そうした状況の中でこれから必要になってくるのがまさに教養です。豊かな教養の上に立った教育・研究は大学の発展に必ずや寄与するものであります。本学でも教養教育をさらに発展させていきたいと考える所存です。

本学は、開学11年目を迎え、今年度からは現代英語学科も加わり計８学科となります。それにより、さらに広範な専門分野の研究成果を世に発信することができ、本学の独自色をより鮮明に打ち出すことができるものと自負しております。

紀要は大学教員の貴重な研究成果であり、大学にとって何物にも代えがたい知的財産であります。

今回の紀要は平成最後の発行という意味で、一つの節目とも位置付けられるものとなりました。新たな元号に変わった後も、本学紀要が学術誌としてさらに充実したものとなることを期待し、私からのご挨拶とさせていただきます。

今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。